小学校

平成9年度

教育研究員研究報告書

音楽

東京都教育委員会

平成９年度

音楽教育研究員名簿

地区	学校名	氏名
文京	誠之小	□ 沓掛長一郎
江東	第四砂町小	前田良江
大田	大森第三小	篠塚聡子
世田谷	太子堂小	△ 高田千栄
渋谷	中幡小	二宮ひろみ
板橋	板橋第五小	高橋智子
練馬	開進第一小	◎ 竹本玲子
足立	中島根小	小林佐織
葛飾	葛飾小	△ 大庫由紀子
江戸川	大杉小	□ 吉永克巳
八王子	元八王子東小	石井世津子
立川	第四小	仁科明美
武蔵村山	第九小	□ 佐藤和美
武蔵村山	第十小	槁爪恭子

◎世話人　□副世話人　△記録

担当　教育庁指導部初等教育指導課　鈴木春樹

目　　次

Ⅰ　研究主題と研究の内容

1　研究主題設定の理由 …… 2

2　研究の内容

(1)　子どもの実態 …… 3

(2)　目指す子ども像 …… 3

(3)　研究仮説 …… 4

(4)　研究の視点 …… 4

(5)　研究の方法と指導の手だて …… 4

Ⅱ　実践例

【実践１】　音の重なりを感じてアンサンブルをしよう　第５学年 …… 8

【実践２】　ぼくらのラ・バンバをつくろう　第６学年 …… 12

【実践３】　日本のふしに親しもう　第５学年 …… 16

【実践４】　３拍子のながれにのって　第３学年 …… 20

Ⅲ　研究のまとめと今後の課題 …… 24

＜概　要＞

子どもが創造的な音楽をするには，工夫して表現することが大切である。そのためには，音楽のよさや美しさを感じ取れるような指導の手だてが必要となる。そこで，本研究では，音楽的な要素に視点を当て，４つの指導の手だてを通した授業を展開した。

各実践では，子どもの思いや感じ方・活動の様子などから４つの指導の手だてについて有効性を検証した。

Ⅰ　研究主題と研究の内容

音楽的な要素を感じ取り，工夫して表現する授業の展開

1　研究主題設定の理由

「できた！」「楽しかった！」「もう一度やりたい！」　子どもたち一人一人が満足感を味わったとき，次への活動の意欲となる。また，意欲をもつことにより，自らのよさや可能性を発揮することもできる。

変化の激しいこれからの社会をたくましく生きていくために，学校教育が目指すのは，自分で課題を見付け，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する資質や能力をはぐくむことである。音楽部会では共通研究主題を受けて，以下の二点が「生きる力」をはぐくむ上で重要と考えた。

・子ども一人一人が音楽活動の様々な場面において，自分の思いや感じ方を表現する。
・表現を工夫することによって，主体的で創造的な音楽活動をする。

そのためには，日々の授業に生きる教師の支援の在り方を追究していくことが大切になる。そこで，研究主題を「音楽的な要素を感じ取り，工夫して表現する授業の展開」と設定した。

子どもが「音楽的な要素を感じ取り，工夫して表現する」とは，次のように考える。子どもは自分の気持ちや思いを自然に表現しているとき，無意識のうちに音楽的な要素を感じ取っている。例えば，低学年では拍の流れやリズムのおもしろさを感じて身体表現したり，強弱の変化を感じ取って表現したりする。また，中学年以降は音色の違いを聴き比べたり，強弱の変化を工夫したり，音量のバランスや速度，音の重なりや楽器の組み合わせなどを工夫して表現したりする。

子どもは音楽を主体的に聴いて，音楽的な要素を感じ取る。また，教師の適切な手だてにより，もっとよく表現したいと思い，自分の気持ちにあった音色や音量，速度等を工夫するようになる。さらに，友達と学び合う中で，自分の中にはない友達の表現のよさを発見し，自分の表現に生かそうとする。本研究のねらいは，工夫して表現する活動を通して，音楽とかかわる喜びや満足感，成就感などを味わうことができる授業の展開の在り方を探るものである。子どもが音楽を心から楽しい，美しいと感じたとき，生涯にわたって音楽を愛好する心情がはぐくまれていく。

2　研究の内容

研究を進めるに当たっては，子どもの実態調査を行い，目指す子ども像を設定した。また，音楽的な要素に視点を当てた指導について共通理解を図り，各実践の指導の手だてについて有効性を検証することとした。

(1)　子どもの実態

子どもの実態を把握するため，研究員所属校（14校）で質問紙法による調査を行った（実施時期は６月下旬から７月上旬）。調査の集計・分析の結果，次のような実態が浮かびあがった。

- 子どもの大半は音楽の学習が好きである。
  （4990名中76％の子どもが音楽の授業を「とても好き」「好き」と答えている。）
- 子どもが楽しく感じるのは，
  ①　音楽を共につくりあげていく喜びを感じたとき，
  ②　（どんなふうに表現したいのかをつかみ）表現への見通しをもつことができたとき，
  ③　音楽活動を通して，その表現のよさなどを見出したとき，
  ④　友達や先生に自分の表現を認められる喜びを感じたり，友達の表現のよさを認め生かしていく喜びを感じたりしたとき，などである。
- 分からないことやできないことがあるとき，子どもは音楽の学習を難しいと感じる。

(2)　目指す子ども像

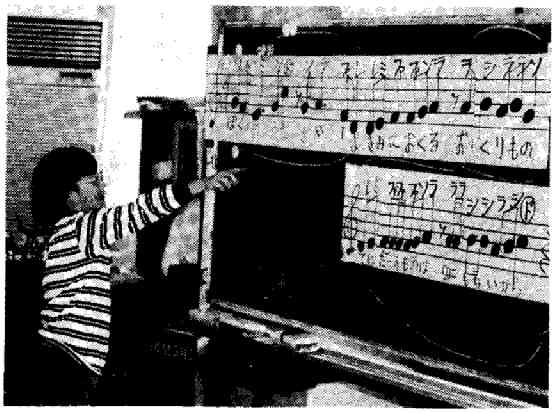
これらの実態から，表現を工夫し，つくりあげていく喜びを感じることが，子どもにとって大切だと考える。また，子どもが表現のよさを感じ取るのは，音楽の美しさや楽しさにふれ，満足感をもつときだと考える。

そこで，目指す子ども像を次のように設定した。

いろいろな音楽にふれ，リズムの面白さや旋律の美しさなどを感じ取り進んで音楽活動する子ども

「もう少しゆっくりやってみよう。」「強弱をはっきりさせよう。」など表現を工夫し最後までやり遂げる子ども

友達の表現を聴いて共感したり，そのよさを自分の活動に生かして，表現の幅を広げようとする子ども



(3) 研究仮説

授業の計画をたてるとき，教師は，楽曲の教材性を分析したり，子どもの実態に合った学習内容を吟味していく。特に，活動することによって深められる「その音楽のよさ」を明確にしていくことが大切である。子どもが満足感や達成感をもつには，自分の感じ方や考えを生かして活動できる場面が不可欠である。そこで，研究仮説を次のように設定した。

音楽的な要素に視点を当てた指導の手だてを考え，子どもが工夫して表現するような授業を展開すれば、子どもは音楽の美しさ、よさを感じ取り満足感を味わうであろう。

(4) 研究の視点

「この曲はリズムが面白い。」「きれいな音色で途中から別の音も聞こえたよ。」「この歌はもう少し速いテンポで歌いたい。」など，子どもの音楽に対する感じ方は様々である。子どもの様々な感じ方をもとに，自分にとっての価値ある新しいものをつくり出すことは，「創造的な音楽学習」にほかならない。

本研究では，音楽的な要素をリズム，旋律，音の重なり，強弱，速度，構成，音色などとして捉え，音楽的な要素に視点を当てた指導の手だてを工夫しその有効性を探っていく。これは，音楽を概念的に分析したりするのではなく，音楽を聴いたり，歌ったり，楽器で演奏したりする活動を通して，子どもの思いやイメージを広げることである。工夫して表現する活動としては，以下の活動が挙げられる。※

① 既存の音楽作品（歌唱曲や合奏曲など）を自ら工夫して演奏したり，積極的にそのよさや美しさを感じ取りながら聴いたりする活動

② 既存の音楽作品とのかかわりを通して，より広がりのある音楽表現を工夫していく活動

③ 自分の思いや自由な発想に従って，新しい音楽をつくって表現する活動

これらの活動を展開していくうえで，子どもたちが試行錯誤し，自分の表現に自信がもてるようになったり，友達の表現のよさに共感したりする過程が重要である。音楽は本来創造的な活動である。いろいろな活動を通して，子どもたちが音楽とのふれ合いを楽しむことはもちろん，音楽的な要素の一部分に気付いたり意識したりしていくことが，工夫して表現する力を伸ばすことにつながると考える。

(5) 研究の方法と指導の手だて

本研究では，子どもが音楽のよさを感じ取って「聴く」ことや，音や声・言葉の身体の動きなどで「表す」ことを広くとらえ，子どもの姿を見取っていけるよう，次のような方法で研究を進めていく。

【研究の方法】

・子どもの実態調査を行い，音楽の授業に対する思いを読み取る。
・授業研究を通し，子どもの変容を分析する。
・各実践の指導の手だてについて，有効性を検証し，一般化していく。

授業を展開していくなかで，教師は子どもの活動を見取り，一人一人に合った支援をしていく必要がある。すぐに「音」や「声」に出して表現して満足している子どもには、「表現方法をさらによいものにしていく工夫」を促す。また，何度試しても納得がいかないという子どもには，教師が一緒になって試しながらその子どもの思いに共感していくよう，方向付けをしていく。本研究では，これらの支援の中から，音楽的な要素に視点を当てた次の４つの指導の手だての工夫について，その有効性を探っていく。なお，次項の表は，４つの指導の手だての具体的な例を示したものである。

【指導の手だて】

教材選択と教材開発	学習の進め方の工夫	「聴く」「表す」を関連づけた活動	タイミングのよい言葉かけ
子どもが意欲をもって取り組める楽曲、課題をつかみやすい範唱・奏のＣＤなど音源を選んだり，学習カードや編曲教材を作成したりする。	学習のねらいに応じて，個別・グループ・全体などの形態等の関連を工夫し，一人一人の課題に合わせて主体的に活動できる場所や時間を確保したりする。 また，事前の学習環境にも配慮する。	音楽のよさを聴いて感じ取ったり，友達の表現のよさを認め合い，自分の表現に生かしていく。 実際に音を出しながら，音色や音の重なり，強弱や音量のバランス，構成などについて子ども自身が判断できるようにしていく。	子どもの姿を的確に捉え，音楽的な要素を意識する言葉かけをする。また，学習の見通しをもてるよう，適切な発問を心がけるが，発問や言葉かけをしないで，子どもの姿を見守ることも時としては必要である。

↑

音楽的な要素

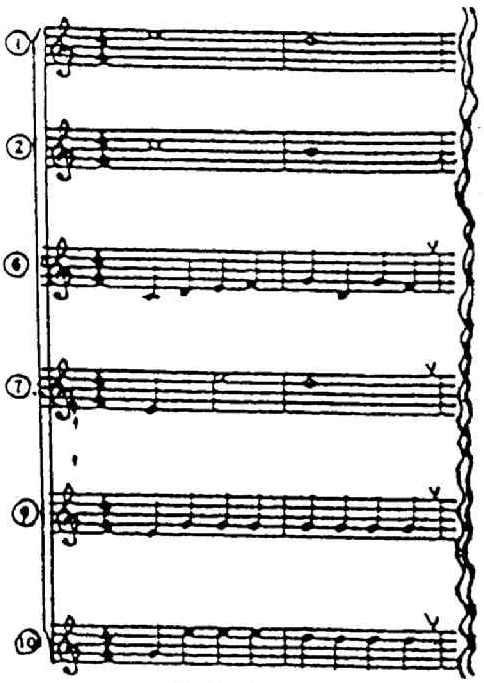
※　参考文献
小学校　音楽指導資料
「新しい学力観に立つ
音楽科の授業の工夫」
平成７年　文部省

指導の手だての例

教材選択と教材開発

- 子どもの心情に合った教材を選択する。
- 旋律や音の重なりなどの美しさを感じ取り，「自分も挑戦してみたい」という意欲のもつ教材を選択する。
- 子どもが無理なく工夫していけるよう，演奏の簡単なパートを用意する。※
- 音楽的な要素を聴き取りやすい範唱・範奏テープを作成する。
- リズムや旋律の反復など，分かりやすく，発展性のある教材を選択する。
- 速度や音色の違いが聴きとりやすいＣＤの準備をする。

パッヘルベルのカノン



※ ②～⑩の中から子どもが選択する。

「聴く」「表す」を関連づけた活動

音楽要素

リズム

旋律

音の重なり

強弱

速度

構成

音色

的な

素

音の長短

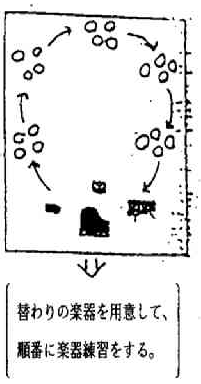
音高

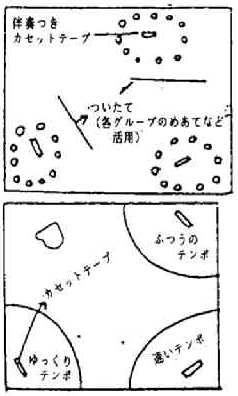
間

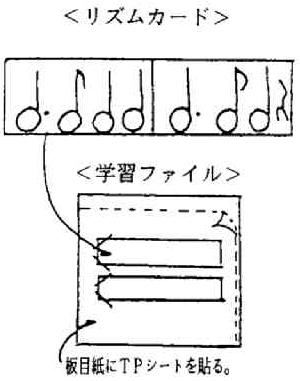
など

学習の進め方と工夫

- 子どもが自分の目的に合わせて学習できる環境を設定する。
- 学習環境を整える。
- 楽器や板書カードなどの使い方を工夫する。
- 子どもが自分の学習過程が見えるように，模造紙やカード，学習ファイルを活用する。
- 子どもが工夫して表現できる柔軟な指導計画を工夫する。
- 個別，グループ，一斉など，学習形態の工夫をする。







タイミングのよい言葉かけ

・学習カードへの朱書き

・学習の見通しがもてるような発問の工夫

・教師の「待ち」の姿勢

・子供の思いを音楽的な要素におきかえて補う言葉かけ

・表現のよさで認める言葉かけ

Ⅱ　実　　践　　例

【実践１】第５学年

題材　「音の重なりを感じてアンサンブルをしよう」

１　研究主題と本実践の意図

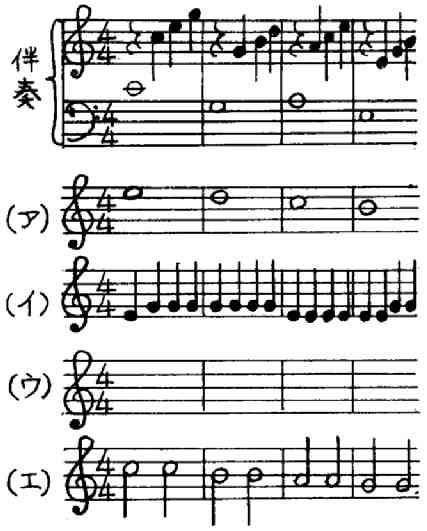
子どもにとって音楽の授業が難しいと感じているときは，音楽活動がうまくできないとき，上手にできないときなどである。そこで，本実践では，「**音の重なり**の美しさを感じ取り，みんなが意欲をもって楽しめるアンサンブル」として題材構成し，子どもが楽しく活動できることを意図した。自分で**旋律**や**楽器**を選び，友達と音を重ねてアンサンブルの活動を進めることは，一つ一つの音に対する鋭い感覚や音楽に対する豊かな感性を磨き，音楽表現の能力を引き出し伸ばすことにつながると考えた。

(1)　本実践における指導の手立て

① 自分でパートを選び，音楽を構成できる教材の開発

パッヘルベル作曲「カノン」を基に，子どもが関心に応じて無理なく楽しく工夫できるようリズムや旋律の異なる九つの旋律を提示する。

アンサンブル楽譜（伴奏と４パート）を提示し，そのうち１パート（ウ）は，グループで九つの旋律から選べるようにする。



② 音の重なりや音色の変化を聴き取ることのできる範奏と音楽の構成とが見て分かる表の活用

曲の構成を考える場面は，児童が聴いて感じることのできるよう二つの範奏テープをつくる。（範奏１，２）また，音楽の構成を視覚的にもとらえられるように，右の表を活用する。

（範奏１）

	1	2	3	4	5
伴奏	○	○	○	○	○
ア				○	○
イ			○		○
ウ		○			○
エ	○				○

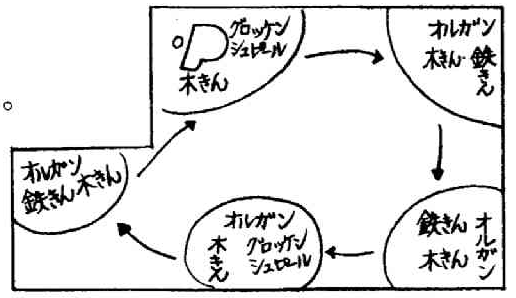
（範奏２）

	1	2	3	4	5
伴奏	○	○		○	○
ア	○	○	○		○
イ		○			○
ウ		○	○	○	○
エ		○		○	○

③ グループごとに練習できる場所の設定

一つの教室で限られた楽器でのグループ活動のため，低音楽器・鍵盤楽器・木琴・鉄琴などを，グループに１台と決め，時間毎に順番にコーナーを変えて練習するよう学習環境を設定する。

また，替わりの楽器を使って練習するようにする。



④ 次の活動につながる言葉かけ

アンサンブルをするときには，自分たちで楽器の音色や特徴をよく聴いて，試しながら楽器を選んだり，合わせたりするよう助言していく。

伴奏は右と左に分けてもいいですよ。

(2) 教　材

① 「カノン」　パッヘルベル作曲　（原曲）

② 「パッヘルベルのカノン」から　（井口　章編曲を基に教材開発したもの）

2　題材の目標

(1) 旋律の重なりに興味をもち，グループでアンサンブルを楽しむ。

(2) よりよいアンサンブルをするために，グループで楽器の音色の組み合わせや曲の構成を工夫して表現する。

(3) 互いの表現のよさや工夫を認め合いながらアンサンブルをする。

3　学習内容

(1) 「カノン」を聴き，音の重なっていく美しさに気付く。

(2) 「カノン」から，九つの旋律をリコーダーで合わせて吹き，音の重なりを感じ取る。

(3) グループで，楽器の音色の組み合わせや曲の構成を工夫して，アンサンブルの練習をする。

(4) グループで発表し，互いに聴き合う。

4　題材の評価規準

ア　音の重なりのおもしろさや友達と合わせる楽しさに気付き，進んでアンサンブルに取り組もうとしている。（観点①）

イ　旋律や音の重なりを感じ取って，楽器の音色の組み合わせや曲の構成を工夫し表現している。（観点②）

ウ　正しい旋律，リズム，美しい音でアンサンブルの演奏をしている。（観点③）

エ　音楽を聴いてそのよさを味わうとともに，友達の工夫したところやよさに気付いて聴いている。（観点④）

5　指導の実際（9時間）

［第1次］ねらい：聴いたり，リコーダーで吹いたりして音の重なりの美しさを感じ取る。		
時	○　主な学習活動	☆　指導の手立て
1	○「カノン」をCDで聴いたりアンサンブルで演奏しているビデオを見たりして，気が付いたことを発表する。	☆映像を通して具体的にアンサンブルのかたちを理解できるようにする。 「大勢でやる合奏とは，どこがちがいますか？」
2	○「カノン」から自分の好きな旋律を選び，友達と合わせて吹いてみる。 A男「この旋律はきれいだし，ぼくにもできそうだ。」	☆伴奏のテープを用意し，必要に応じて活用できるようにする。 ・ゆっくりのテンポ　♩＝60 ・ふつうのテンポ　♩＝96

［第２次］ねらい：グループで楽器の組み合わせや曲の構成を工夫して，アンサンブルの演奏をする。

4	○グループの中で（ウ）の旋律を決め，パートを分担し，楽器を選び練習する。 A男「僕は，（ア）の旋律をリコーダーでやりたいな。」	☆アンサンブル用に，楽譜を用意する。 「なるべくグループの中で同じ楽器にならないようにね。」
5	○旋律の重ね方（範奏１，２）のテープを聴く。 「伴奏とパートを一つずつ合わせて最後は全員で演奏している。」 A男「僕のやっている旋律ができた。」 「（ウ）は６番の旋律だ。」 ○グループに分かれて旋律の重ね方を工夫する。	☆伴奏と４つの旋律の重なりが分かるよう範奏テープと表を用意する。 「２つのテープの違いに気が付きましたか。 ☆音楽の構成を工夫する表を使い，音の重ね方を工夫できるようにする。
6	［Aグループ］ 「まず３つのパートを重ねてみよう。」 A男「伴奏の速さに合わせよう。」 「もう少しゆっくり合わせよう。」 「きれいな音になったね。」 A男「３回目は，僕は休みだ。」 「最後が寂しいよ。」 「最後は，全部の楽器で合わせて盛り上げよう。」 A男「僕は，１回目と２回目，５回目に演奏するんだ。」	
7	○中間発表をする。 B男「あのグループの演奏いいな。」	「重ね方，楽器の組み合わせ，音の響き，音量などをよく聴いてね。」

	パート	名前	1回	2回	3回	4	5		
①	伴奏		○		○	○	○		ピアノ
②	ア		○	○			○		リコーダー
③	ア		○	○	○		○		アコーディオン
④	イ			○		○	○		リコーダー
⑤	イ			○	○		○		げんばんハーモニカ
⑥	ウ			○		○	○		リコーダー
⑦	エ		○		○	○	○		鉄きん
⑧	エ				○		○		げんばんハーモニカ

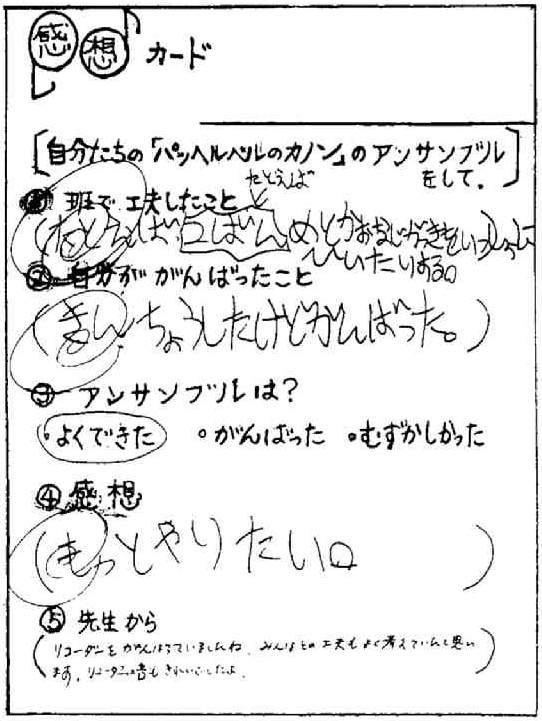
8	（エ）の旋律を木琴でやっていたB男に，「音を長く伸ばすにはどうしたらいいかな？」と言う言葉かけをした。その意図は，音が長く伸びるような奏法に気付くようにすることである。そのときには，奏法を変えなかったが，他のグループの演奏を聴いて，中間発表では，トレモロで楽しそうに演奏をしていた。これは，友達の表現から奏法を学び，自分の表現に進んで生かすことができたからである。

［第３次］ねらい：自分たちのアンサンブルを発表し，互いによいところ工夫したところを聴き合う。		
9	○各グループごとに自分たちのアンサンブルの発表会をする。 ○感想カードを書く	「友達のアンサンブルのよかったところ工夫したところを聴きましょう。」

6　考　察

一人一人が，「自分で旋律や楽器を選び，友達と協力して，一つの音楽をつくりあげた」という喜びをもてたことが本実践の成果である。

児童は，これまで以上に達成感や満足感を体験することができ，次の学習への意欲へとつながった。


感想カード

［自分たちの「パッヘルベルのカノン」のアンサンブルをして，］

① 班で工夫したこと

② 自分ががんばったこと

③ アンサンブルは？

よくできた　・がんばった　・むずかしかった

④ 感想

（もっとやりたい。）

⑤ 先生から

① A男は，リコーダーに対して苦手意識をもっていた。しかし，美しく，しかも簡単に演奏できる（ア）の旋律は自分にもできると進んで友達と合わせた。アンサンブルでもリコーダーを吹き意欲的に取り組んだ。感想カードには「もっとやりたい。」と書いていた。

これは，範奏テープで音楽の特徴をつかみ自分で旋律，楽器を選ぶようにしたことにより，『これならできる』という自信がもてた結果である。

② 構成を考える場面で使用した表は，音の重なり方を視覚的に捉えるとともに自分の演奏する順番が確認でき，どの子どもも自分の演奏に自信をもって取り組めた。また，他のグループの演奏を聴くときにも，音だけでなく，視覚的にも演奏を確認しながら，聴くことができた。

③ 楽器を選ぶとき，ほとんどのグループがピアノ伴奏を構成表に取り入れていた。しかし，練習場所，替わりの楽器で練習することを決めたことで，グループで工夫する活動がスムーズにできた。

※ なお，以下の点が課題として残った。

④ 構成を考える場面では，パズルにならないよう音をいつも確かめながらアンサンブルをすることが大切である。そのために，速さ，音量，奏法について，タイミングのよい言葉かけの工夫が一層必要である。

【実践２】第６学年

題材　「ぼくらのラ・バンバをつくろう」

１　研究主題と本実践の意図

高学年は，合唱，合奏，アンサンブルなどの活動を通して，ハーモニーの美しさ，楽しさを経験してきている。しかし，より高度なものに意欲を感じる子ども，難しいとすぐ思い込んでやる気をなくす子どもなど，個人差も出てくる。一人一人が自分の思いを表現でき，お互いのよさを生かしながら楽しく活動できる場を設定していくことが大切である。

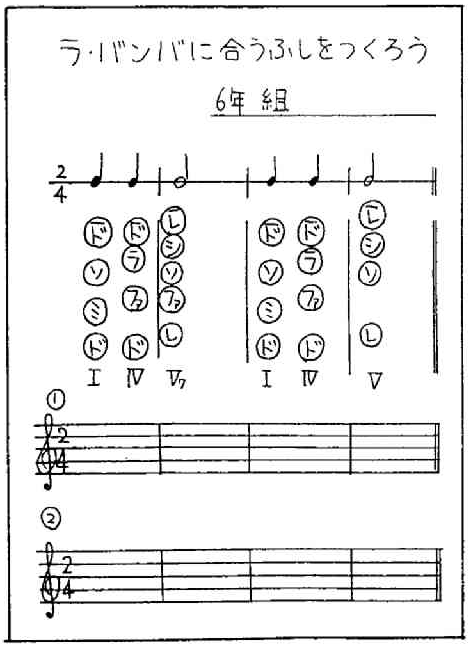
本実践は，音楽的な要素の中で，特に，「**音の重なり**」を感じながら自分の「**旋律**」をつくり，「**音の重なり**」や「**構成**」を工夫していく活動である。工夫していく過程で，「こういう表現をしたい」という子どもの思いや願いが深まる。また，お互いに聴き合い，認め合うことを通して，より音楽のよさを発見し表現する意欲が高まると考えた。そこで，次の４つの指導の手立てを工夫していく。

(1)本実践における指導の手立て

①工夫のしやすい教材の選択と音楽的な要素の聴き取りやすいＣＤやテープの工夫

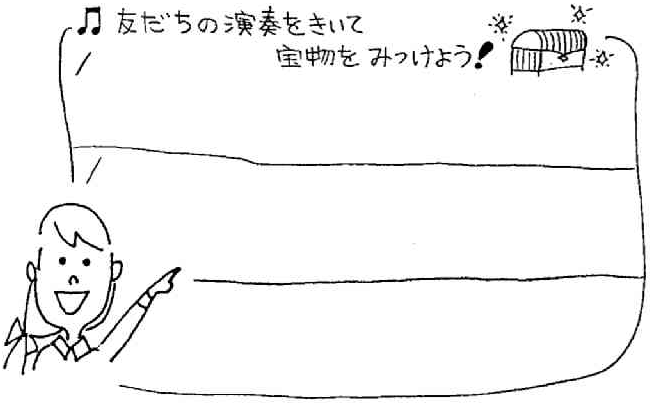
主旋律，副旋律，和音進行が簡単で演奏が容易な教材を選び，技能面でつまずくことなく工夫できるようにする。また，旋律を少なくしておくことで，自分のつくった旋律を合わせやすいようにする。

さらに，和音進行の繰り返しやいろいろな旋律が聴き取りやすいＣＤを用意する。和音の聴きを感じながら，旋律をつくるように，伴奏（和音進行）を繰り返し録音したテープを準備する。



②学び合いの場の設定

友達の表現を聴き合う場を多く設定し，自分の表現を振り返り，よいところを生かしていくようにする。

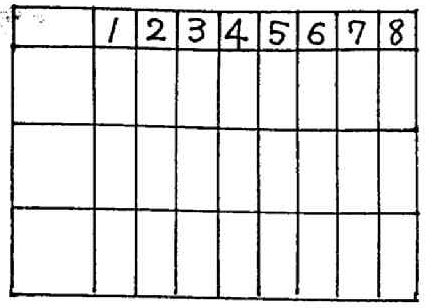


③簡単なルールで工夫できるカード，使用する楽器の選択，及び工夫しやすい構成表の活用

和音の構成音だけを組み合わせるというルールのもとに，カードを使って旋律をつくるようにする。

同質の音色の方は音がバランスよく調和すると考えて，使用する楽器をリコーダーにしぼる。このことは，みんなで一緒に音楽室で学習できるよさもある。

また，一緒に考えたり，工夫したり，演奏したりできるように，みんなで見合える構成表も用意する。



	1	2	3	4	5	6	7	8

④学習の見通しをもつようにする朱書き

一人一人の活動を把握し，その時間の活動を認め励まし，次の学習の見通しをもつような内容をカードに朱書きするように心がける。

(2)教　材

①「リボンのおどり」　　メキシコ民謡　橋本祥治編曲

②「ラ・バンバ」　　メキシコ民謡　ロス・インカス演奏

ペペ・レオンとラテンバンド演奏

2　題材の目標

(1)　和音の響き，音の重なり，リズムのおもしろさを感じ取り，意欲をもって学習に取り組もうとしている。

(2)　自分たちの感じ方を生かして，旋律や音の重なり，全体の構成を工夫し，表現する。

(3)　互いの表現を聴き合い，よさや工夫したところを認め合い，表現の工夫をする。

3　学習内容

(1)　原曲の雰囲気や和音の響きを感じ取って，「ラ・バンバ」を聴く。

(2)　和音の響きに合わせて，「ラ・バンバ」を聴く。

(3)　グループで協力しながら，旋律や音の重なり，曲の構成などを工夫して，自分たちの「ラ・バンバ」をつくって演奏する。

(4)　互いの表現を聴き合い，よさや工夫したところを認め合い，友達のつくった「ラ・バンバ」を楽しんで聴く。

4　題材の評価規準

ア　音の響き合いに興味をもって，友達と協力して意欲的にグループ活動をしている。（観点①）

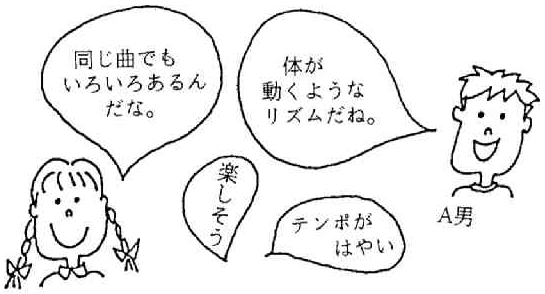
イ　和音の響きを感じて旋律をつくったり，原曲の雰囲気を生かして表現を工夫したりしている。（観点②）

ウ　リズム，音程，奏法に気をつけて，互いに聴き合いながら演奏している。（観点③）

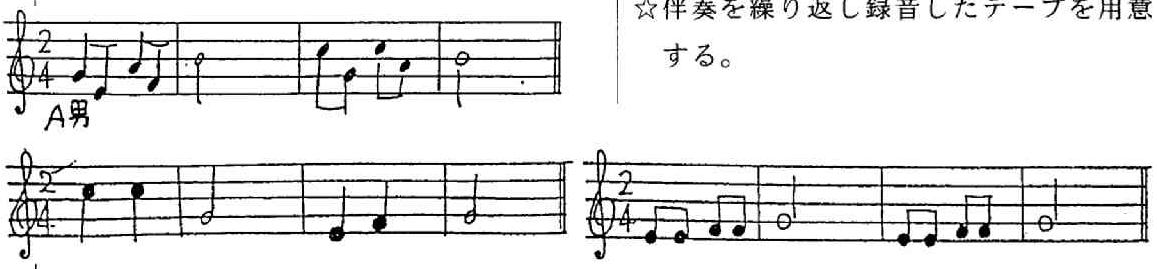
エ　友達の表現を聴いて，そのよさを感じ取って聴いている。（観点④）

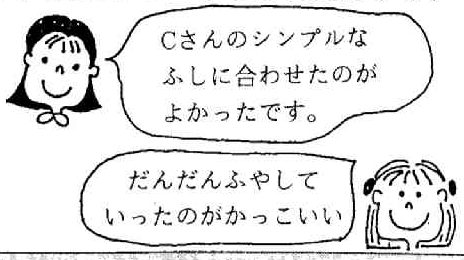
5　指導の実際（9時間）

［第1次］ねらい：「ラ・バンバ」の雰囲気や音の響きを感じ取る。

時	○ 主な学習活動	☆ 指導の手だて
1	○「ラ・バンバ」を聴き，感想を発表する。  ○「リボンのおどり」を聴き，主旋律を歌ったり，低音に合わせて，合唱部分をリコーダーで演奏する。	☆民族音楽の感じが強いものと，和音進行の繰り返しが聴き取りやすいものとを用意する。

［第2次］ねらい：和音の響きに合わせて自分の旋律をつくり，アンサンブルを工夫する。

2	○「リボンのおどり」を聴き，音の重なりから，使われている和音を調べる。 ○「リボンのおどり」の和音進行に合わせた別の旋律をつくる。  自分の旋律をつくったA男とB男は，自分たちで旋律を合わせてみて，「先生きれいに重なりあったよ。聴いてみて」と知らせに来た。これはカードで音を和音の構成音に限定しておいたので，簡単に合う旋律をつくることができたからだと考える。	☆いろいろな旋律が使われていることに気付くようにする。 ☆和音進行と構成音を書いたカードを用意し，教師がつくり方を示す。 ☆伴奏を繰り返し録音したテープを用意する。
3	○みんなで友達のつくった旋律を聴き合う。	☆伴奏に合わせてリレー式につなげて吹くようにする。

	○グループに分かれて，自分のつくった旋律と友達のつくった旋律を合わせてみる ○グループごとに聴き合い，よかったことや，工夫していることを発表する。  	☆互いによく聴き合うように助言する。 ☆いろいろな重ね方を工夫するように助言する。 ☆みんなで一緒に工夫しやすいように，大きな構成表を用意する。

	1	2	3	4	5	6	7	8
A	△	○			○		○	□
B	△		○		○	○		□
C	△			○		○	○	□

［第3次］ねらい：グループ毎に演奏を発表し，互いの演奏を楽しむ。		
4	○発表会をもち，グループごとに発表し聴き合う。	☆演奏の満足感がもてるように，全グループのよさを認める。

6　考　察

本実践では「一人一人の子どもが自分の思いをもって，表現すること」と「友達と一緒に工夫することで，自分の思いをより広げていくこと」ができた。それは，工夫の観点を音楽的な要素を視点に整理していったこと，いろいろな指導の手立てを工夫したことで，子どもにとって分かりやすい課題となったからと考える。

(1)教材選択と教材開発（指導の手立て①）

演奏が容易なので，子どもが安心して取り組めた。A男は歌は大好きだが，楽器は技能面でいつも苦労していることもある。しかし，楽しそうに友達と工夫することができた。また，伴奏を聴くという点で，リコーダーに楽器を限定したことも効果があった。

(2)「聴く」「表す」を関連づけた活動（②）

つくった旋律をリレー式に発表したり，グループの発表を聴き合ったりしたとき，「かっこいいね。」「きれいだね。」といった言葉が多く聞かれた。学習後の感想にも「○○さんのように工夫してみたい。」などと書いている子どもが多かった。

(3)学習の進め方の工夫（③）

A男とB男は「つくる」段階で，「重ねる」ことを自分たちで見付け出した。これは，簡単に持って移動できるリコーダーを使用したことで，たくさんの友達と聴き合うことができたからと考える。

課題としては，カードや構成表を初めから与えてしまったために，音を感じる前に機械的につくってしまう場面も見られた。初めは音たけで工夫するようにして，つまずきが見られたときや記録確認する場面でタイミングよく与えるようにすることが大切であると感じた。

(4)タイミングのよい言葉かけ（④）

認めたり，褒めたり，アドバイスをしたりしたことで，次の活動がより活発になった。

【実践３】第５学年

題材　「日本のふしに親しもう」

１　研究主題と本実践の意図

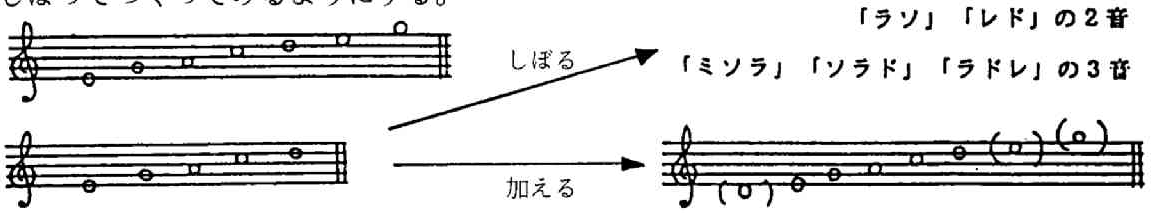
５年生はこれまで，遊び歌や季節の歌として日本の音楽に親しんできた。本実践の意図は，日本の民謡を教材化し，**５つの音**が使われているという日本の民謡の特徴を生かし，音楽的な要素を感じ取るようにしていくことである。そして，その５つの音を使って自分の**ふし**をつくりさらに，グループごとに自分のふしと友達のふしをつなげて，グループのおはやしをつくる活動へと発展させていく。

子どもたちは自分のふしをつくり上げることやグループのおはやしを練習して発表するなどの活動を通して，音楽的な要素を感じ取り，工夫して表現できるようになると考える。そこで次の４つの指導の手だてについて，子どもの変容を通して有効性を検証していく。

(1)　本実践における指導の手だて

①　簡単なルールで表現できる教材

「おはやし」に使われている音は，譜例①のように音域が広いので，子どもたちがふしをつくる際には，譜例②のように使う音の音域をしぼり，必要に応じて高い「ミ」「ソ」や低い「レ」を加えていくようにする。また，つくるのが難しい子どもには，２，３音にしぼってつくってみるようにする。

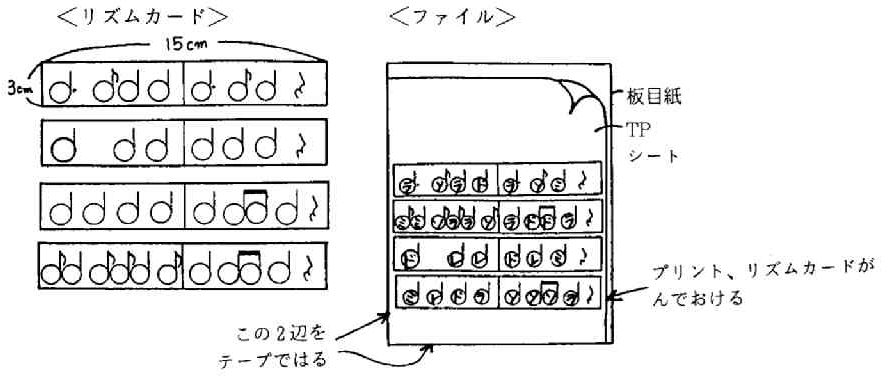


②　模倣を表現に生かす

①でも述べたように，教師の例示も２音から３音，４音と音域を広げていく。また，教師が示したふしを「まね吹き」をすることによって，子どもたちは，ふしづくりに入る前にたくさんの日本のふしに触れ，日本の旋律の特徴を感じ取っていくことができる。この経験はふしづくりをする際に役立っていくと考える。

③　リズムカードとファイルの活用

本題材では，日本の民謡の５つの音を使ってふしをつくることが重点なので，リズムについては，子どもたちの知っている曲のリズムパターンを使ったリズムカードを何種類か用意する。



リズムカードは，楽器で音を出しながらつくったふしを階名（カナ）で書き込むことができるようにしておく。また，4枚を組み合わせて8小節のふしをつくるときには，リズムパターンを自由につなげて試行錯誤し，曲のまとまり（構成）にも意識を向けながらふしをつくることができるようにする。

④　教師からのメッセージ（朱書き）を生かす

つくったふしが書き込まれたリズムカードや友達のつくったふしを聴いての感想を書いた学習カードには，毎時適切なメッセージを子どもに伝えるようにする。教師は，このメッセージが次時の活動に生かされるような内容になるように心がける。

(2)　教　材

①　「子もり歌」　日本古謡

②　「おはやし」　川崎祥悦　作曲

2　題材の目標

(1)　日本の伝統音楽に対する関心を高める。

(2)　日本の民謡の旋律には5つの音が使われているという特徴を感じ取って，聴いたり表現したりする。

(3)　日本の民謡の5つの音を使って自分の旋律をつくり，互いの表現を聴き合って，よさや工夫したところを認め合う。

3　学習内容

(1)　日本の民謡と西洋の音楽の旋律の感じの違いや，日本の民謡の旋律の中でも旋律の感じの違いがあることを感じ取って，聴いたり表現したりする。

(2)　旋律に5つの音が使われているという特徴に気付き，日本の民謡を聴いたり歌ったりする。

(3)　リコーダーや鍵盤ハーモニカで音を出しながら，日本の民謡の5つの音で自分のふしをつくる。

(4)　グループで一つのおはやしをつくり上げ，楽しく演奏し発表する。

4　題材の評価規準

ア　日本の伝統音楽に関心をもち，進んで聴いたり表現したりしようとしている。
（観点①）

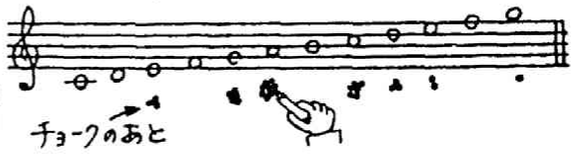
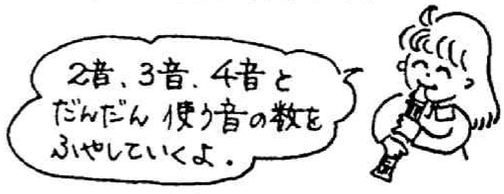
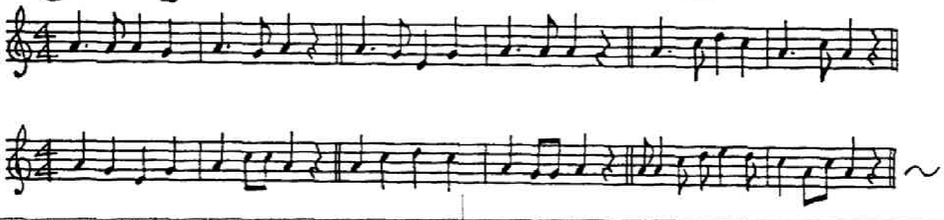
イ　日本の民謡と西洋の音楽の旋律の感じの違いや日本の民謡の旋律の特徴を感じ取って，演奏を工夫している。（観点②）

ウ　日本の民謡の5つの音を使ってふしをつくったり，リズムに合わせて演奏したりしている。（観点③）

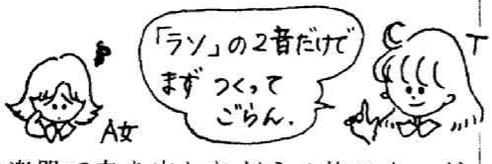
エ　日本の民謡の旋律の感じや特徴に気を付けて聴いたり，友達の工夫したところやよさに気付いたりして聴いている。（観点④）

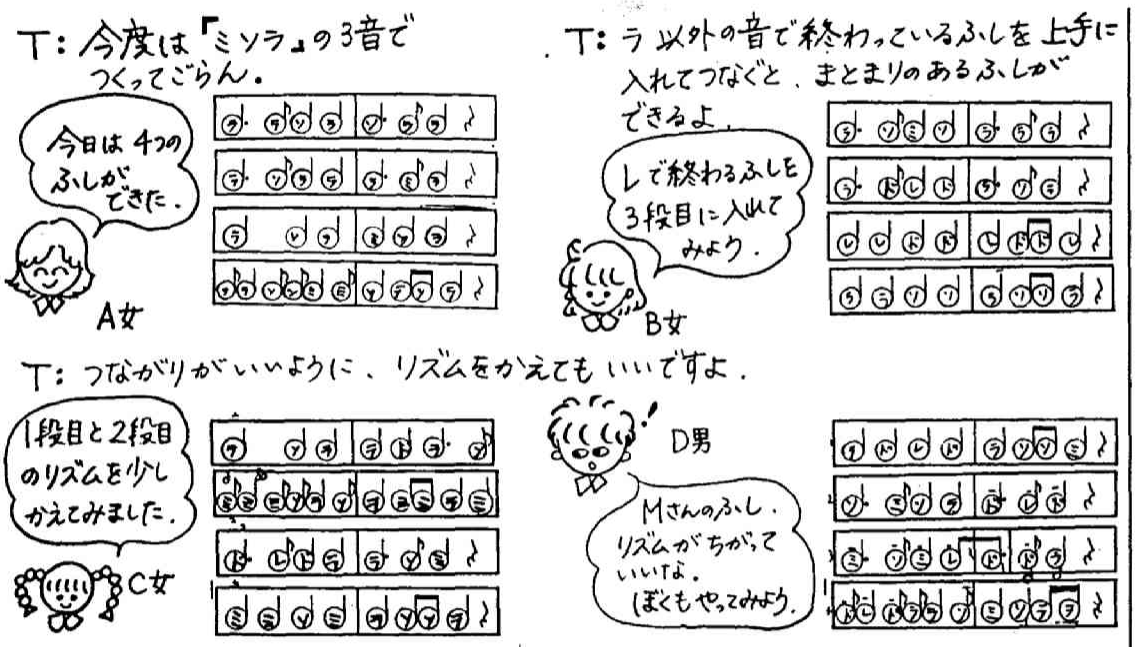
5　指導の実際（8時間）

［第1次］　ねらい：西洋と日本の旋律の感じの違いや，日本の民謡の旋律の特徴を感じ取る。

時	○ 主な学習内容	☆ 指導の手だて
1	○日本の民謡と西洋の音楽の旋律の感じの違いを感じ取る。	
2	○「おはやし」の主旋律を階名唱し，リコーダーで演奏する。	
3	○「おはやし」と「子もり歌」を階名唱し，気付いたことを発表する。 	☆音階を五線譜で掲示し，階名唱に合わせて指でたどる。 
	○教師がつくったふしを聴いて，リコーダーでまね吹きをする。 	☆日本の民謡の特徴を感じ取ることができるような旋律をつくり，例示する。 
		

［第2次］　ねらい：日本の民謡の旋律の特徴を生かして，つくって表現する。

4	○リコーダーが鍵盤ハーモニカで音を出しながらふしをつくり，リズムカードに記入していく。  	☆リズムパターンの違うリズムカードを用意し，各グループに配っておく。
5	○楽器で音を出しながら4枚のカードをつなぎ合わせて，8小節の自分のふしをつくる。	☆ふしのつながりがよくなるように，リズムを変えたり，音を変えてもよいことを伝える。



6	○グループでテーマになるふしを1つ選び，自分のつくったふしと友達のつくったふしを合わせて1曲にする。	☆教師がテーマになるふしを2曲つくる。
［第3次］　ねらい：グループごとにおはやしを発表し，互いによいところ，工夫したところを聴き合いながら楽しむ。		
7	○グループごとに発表し，聴き合う。	☆満足感がもてるように，よさを認める

6　考　察

本実践では，一人一人が自分のふしをつくり上げ，グループで1曲にして練習し発表する過程で，何度もつくったふしを演奏したり聴いたりし，日本独特の旋律に親しむことができた。ふしをつくっていく活動やグループ活動において，リズムカードの活用は有効であった。

A女のようにはじめつくるのに困っていた子どもも，2音，3音でつくることによって自分のふしを完成することができた。どの子どももふしづくりに取り組み，自分のふしをつくり上げることができたのは，簡単なルールで表現できる教材であったからだと考える。

4枚のリズムカードをつないでふしをつくる際には，まとまりのあるふしになるように言葉かけをした。B女はレで終わるふしを3番目に入れ，リズムのまとまりも考えながらふしをつくり上げた。C女はつくっていくうちにリズムを変えたいと言ってきたので，変えてみるように助言した。C女がリズムを変えたのを聴いて，D男は自分もやってみようと思い，リズムを工夫していった。D男は教師の言葉かけだけでなく，友達の表現を聴くことによって，さらに工夫することができた。C女のような作品を，意図的に全体に知らせていく場を設けることが必要であると考える。その時に，曲のまとまりのよさは多様なので，どこがよさなのかを子どもたちが気付くようにしていくことが課題である。

【実践４】第３学年

題材　「３拍子のながれにのって」

１　研究主題と本実践の意図

子どもが今もっている力を発揮し，音楽のよさを感じ取ったり，感じ取ったものを基に自分なりの表現を工夫したりすることができれば，その経験は必ず生かされるものになる。

本題材では，３年生の子どもが楽しんで簡単にできる身体表現とリズム伴奏によって，３拍子の**拍の流れ**を感じ取り，工夫して表現するようにしたものである。この活動を通して培われた力は，今後生き生きとした音楽表現を生み，活動の楽しさを味わうことが，次の音楽活動への意欲につながるものと考える。

(1)　本実践における指導の手だて

本実践では，子どもが音楽的な要素を感じ取れるようにするために，以下の指導の手だてを工夫する。

①活動が広がる教材の選択

・本実践における教材は，楽曲，バンブーダンス（ダンスに用いる道具，跳び縄），楽器などである。そこで次のような教材の工夫を図る。

・速さや感じの違う３拍子の楽曲を通して，３拍子の感覚をつかむようにする。

・バンブーダンスは，竹を跳びながらステップするダンスなので，全身で３拍子の流れを感じ取ることができる。また，この時期の子どもが喜ぶ活動であり，いろいろな子どもが音楽の学習の中で認められる機会をつくることができる。一方，動いている竹を跳ぶことで，拍の流れが途切れてしまう子どものためには，床に引いてあるラインや縄跳びの跳び縄で試すようにする。

・バンブーダンスの台にフエルトを巻き，強拍である１拍目と２，３拍目の違いが音響的にも感じ取れるようにする。また，バッテリーのリズム伴奏の楽器は，１拍目に大太鼓など低音楽器を使用し，ダンスと伴奏が１拍目で合わせられ流れが感じ取れるようにする。

②シンセサイザーによる自動伴奏の活用

シンセサイザーの自動伴奏を作成し，子どもが跳びやすい速さにその場で変えられるようにする。また，その間教師は子どもの様子を見取るようにし，タイミングよく助言や支援していくようにする。

③互いの表現のよさを見合う場の工夫

互いに鑑賞する機会を多く設定したり，互いの表現がよく見えるような隊形で学習することにより，友達の表現のよいところを自分の表現に生かせるようにする。

④一人の工夫を皆に広げる学習カードの工夫

一人一人の子どもの感じたことや工夫したことを知り，朱書きによって認めたり助言したりする。また，次の時間にその子に，あるいは全員に対してそれを基にして言葉かけをし，一人一人のめあてにつなげるようにする。

(2) 教　材

①「いるかはざんぶらこ」　　東龍男　作詞／若松正司　作曲

②「ラ・クカラチャ」　　メキシコ民謡

③「メヌエット　ト長調」　　ベートーベン作曲

④「メキシカンハットダンス」，「フィリピンの民族舞踏～バンブーダンス」　（ビデオ）

2　題材の目標

(1) 拍の流れを体で感じ取って，楽しんで表現活動できるようにする。

(2) 拍の流れを感じ取り，それを生かして身体表現やリズム伴奏を工夫する。

(3) 拍の流れにのっている表現のよさに気付くようにする。

3　学習内容

(1) 3拍子の拍の流れを感じ取って，リズム遊び，リズム伴奏や身体表現の工夫をする。

(2) 拍にのっている友達の動きや，工夫を認め，自分の表現に生かして表現する。

4　題材の評価規準

(1) 音楽を体を使って表現する活動に関心をもち，意欲的に取り組もうとしている。（観点①）

(2) 3拍子の拍の流れを感じ取り，表現の工夫をしている。（観点②）

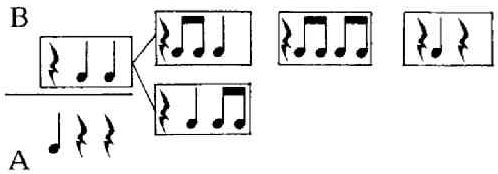
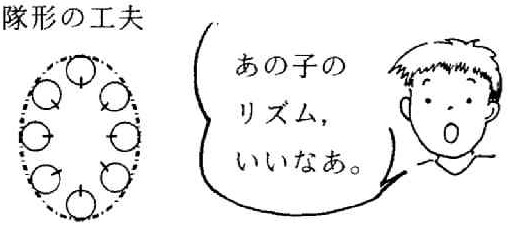
(3) 3拍子の拍の流れを感じて，リズム打ちや身体表現をしている。（観点③）

(4) 拍の流れにのっている表現のよさを感じ取れる。（観点④）

5　指導の実際（7時間）

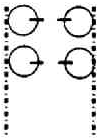
＜第1次＞　ねらい

リズム遊びや鑑賞を通して，拍の流れにのって体を動かす楽しさを味わう。

時	○　主な学習内容	☆　指導の手だて
1	○3拍子のリズムを一人一人がつくって全員でつなげる遊びをする。 基本のリズム　・始めはAを（教師はB） ・次にBを　（教師はA）  ○「メヌエット　ト長調」を聴いて，リズム打ちや身体表現をする。	☆教師は楽器でリズムを打つ。 ☆順番以外の子も拍にのるようにする。 ☆隊形の工夫  ☆ 「リズムが合うかな？」
2	○「メキシカンハットダンス」のビデオを鑑賞する。 ○「ラ・クカラチャ」を歌う。	☆「メヌエットと比べてみよう。」

○「ラ・クカラチャ」に合わせて身体表現をする。

☆隊形



ひざを曲げて大きく揺れるような感じにするといいんだね。

＜第２次＞　ねらい

バンブーダンスの基本のステップを練習し，３拍子の拍の流れを感じて表現する。

3・4・5

○「バンブーダンス」のビデオを鑑賞する。

R男　楽しそう。

E女　わーいおもしろそー

○「いるかはざんぶらこ」を歌う。

☆１拍目の休符に打楽器の音を入れ，流れにのって歌えるようにする。

○手でリズムを取りながら歌い，竹の動きを覚える。（棒を持って）
○ステップサークルで足の動きを練習する。
（交代で）

タンブリンの音を聴いてから歌いましょう。

○グループでバンブーダンスの練習をする。

E女のカード

・くふうしたところなど
とんでる人のリズムに合わせていました。とんでるとき竹の人がじゅうずだったのでうまくとべました。竹の人のリズムと、とんでいる人のリズムが合うと、うまくいくダンスだね

K男のカード

・むずかしいところなど
竹の速さが、少し速かったのでうまくできなかった。

カードからその時間にK男はうまく跳べなかったということがわかった。そこでE女の感想を紹介した後，K男のとびたい速さに竹を動かす子が合わせるように助言した。それによりK男と竹を動かす子は同じ速さの拍感がもてるようになった。

・くふうしたところなど
ぼくの速さを竹の人につたえたらできた。とべるようになってよかったね。

○互いに見合いながら，歌や打楽器の伴奏に合わせて踊る。

☆シンセサイザーの自動伴奏を流し，旋律に合わせて踊れるようにする。

＜第３次＞　ねらい

ダンスやリズム伴奏を工夫して楽しみ，互いに鑑賞しながら高め合う。

6・7

○ ダンスと楽きのばんそうを工夫して一つにしよう

［ダンス］
新しい跳び方を考える

☆いろいろな工夫ができるようにする。
・両足で跳んだり同じ足が続いてもいいよ
・同じ方向へ出てもいいよ。
・跳び上がらなくてもいいよ。

［リズム伴奏］
リズムや演奏の仕方を工夫する

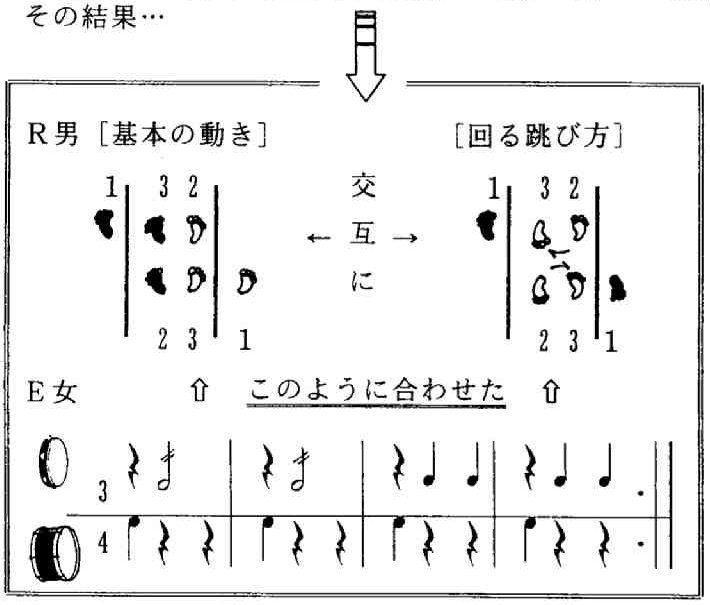
タンブリンでトレモロ奏をしているＥ女に対し「その音いい音ね。ダンスに合わせて基本の打ち方と組み合わせてみたら。」と言葉かけした

その結果…

［ダンス］
基本のステップと組み合わせる

［リズム伴奏］
基本のリズムと組み合わせる

○各グループの表現を鑑賞する。
○踊りや楽器のリズム伴奏と一緒に皆で歌う。



○友だちのダンスやえんそうの感そうを書こう。（4・5はん）
4 Eさんのタンブリンでシャララ～というのがよかったです。
5. A美さんもタンブリンでさいしょはきほんのリズムであとからシャララ～しがはいった。友だちのよいところをよくみたりきいたりできましたね。

6 考 察

身体表現とリズム伴奏を活動の中心に据えた本実践を通して，いろいろな子どもの生き生きとした姿を見ることができた。それは本実践における活動が，３年生のどの子どもにとっても音楽的な要素を感じ取りやすい活動であったからと考える。

① Ｋ男やＥ女の１時間の活動の様子や，Ｅ女が学んだことがＫ男のめあてにつながるということが，学習カードによって明らかになった。グループの活動において個々の子どもの様子が把握できるという点，教師の言葉かけを通して他のグループの子どもとの学び合いに生かせるという点で，学習カードが有効であったといえる。

② 指導の実際の最後に載せた子どもの感想は，友達の表現を鑑賞することを通してその表現の音楽としてのよさに気付き，更に感性が高まっていったことの表れと捉えられる。これにより，鑑賞し合うことによってより感性が磨かれるといえる。

③ フレーズを意識した構成の工夫にも目を向けるようにしたいと考えたが，現段階ではまだそのよさに気付かない子どもの方が多く，機会を改めて学習するようにしたい。

Ⅲ　研究のまとめと今後の課題

1　研究の成果

子どもが自ら工夫して表現し，満足感や成就感を味わうには，音楽の美しさやよさを体で感じ取ることが大切である。本研究では，音楽的な要素に視点を当てた指導の手だての工夫について，授業研究を通して研究を進めてきた。

音楽的な要素を感覚的に捉え，工夫して表現するための指導の手だてとして，「教材選択と教材開発」「学習のすすめ方の工夫」「聴く・表すを関連づけた活動」「タイミングのよい言葉かけ」の４つについて実践ごとに工夫し，その効果を子どもの姿から検証してきた。

その結果，音楽的な要素に視点を当てたことにより，子どもが工夫して表現する観点がはっきりし，進んで音楽に向き合うようになった。また，４つの手だてにしぼったことにより，子ども一人一人がもつめあてに応じた具体的な手だてを打つようになり，ポイントを押さえた指導をすることができた。各実践から得られた研究の成果は以下の通りである。

① 音楽的な要素を感受しやすい教材を選択したり，開発したりすることで，子どもたちは意欲的に学習に取り組むだけでなく，工夫して表現することに対して喜びを見いだし，満足感・達成感を得ることができる。

② 児童相互の聴き合いの場を設定することで表現を共に楽しんだり，自己評価や相互評価により，次の活動へのねらいをもつことができる。

③ 学習カードの活用，教具の工夫，個別・グループ・全体などの意図的な学習形態の工夫によって，一人一人のよさが表れ，友達との学び合いも積極的に行われる。

④ 吟味された言葉かけによって，音楽に対する子どもの目が変わる。このことから，教師の適時性のある言葉かけが，重要であることが分かった。

2　今後の課題

本研究を通し，多くの成果を得ることができたが，音楽的な要素を分析的なものにしないためには，感性を育てるという教科の目標を忘れないようにすることが大切である。また，子どもたち一人一人の思いやつまずきを素早く捉える教師の目を，養っていかなくてはならない。

しかし，研究が深まるにつれ，新たな課題も見えてきた。今後の課題は，以下の通りである。今までの成果を基に，定着を図りながら今後も更に努力を重ね，研究していく必要がある。

① 子どもの実態に応じて，柔軟に取り扱うことのできる教材の開発を行う。

② 一人一人の表現の工夫を全体に生かしていくための指導の工夫を更に進める。

③ 一人一人が自分の目的に合わせて学習に取り組めるような学習環境の充実を一層目指す。